沼田町における『歩いて暮らせるまちづくり』について

沼田町 産業創出課
参事 春山 顕一 様

● 沼田町について

沼田町の春山です。どうぞよろしくお願いします。今日は沼田町の暮らしの安心センターという建物の中からお話をさせていただいております。小さな部屋で一人っきりで居りますのでノーマスクでお話をさせていただきます。

私は平成25年に、これからお話しさせていただきます新しいまちづくり、農村型コンパクトエコタウン構想という構想を進めるために教育委員会から企画の部門に異動してきまして今年で8年目になっています。この8年間の中でこの町は大きく変わり始めているという状況です。「歩いて暮らそう宣言」と書かれていますけれども、歩いて暮らす生活を始めましょうということで、それが買い物支援にもつながっているという事例の紹介です。

その前に沼田町の紹介も少しさせていただきます。皆さん北海道の方ですので、「見たことあるよ」だとか「聞いたことあるよ」という方がいると非常に嬉しいのですけれども、毎年8月に「夜高あんどん祭り」という大きなお祭りをやっていまして、これは沼田町開拓の祖であります沼田喜三郎さんの出身地である富山県小矢部市から伝承したお祭りです。6月ぐらいから約100日かけて町民がゼロから作り上げる巨大なあんどんを、お祭りの当日にこのようにぶつけて壊してしまうという勇壮なお祭りであります。昨年は44回のお祭りだったのですが、残念ながらコロナで中止となってしまいまして、今年は何としてもやりたいと今準備をしているところです。

町の地勢としましては札幌から北に100 キロのところに位置しておりまして、石狩平野の北の端にあります。旭川市と留萌市の中間ぐらいに位置をしておりまして、旭川空港はもちろん近いのですが、札幌市や新千歳空港にも程近い状況にありますので東京にも日帰りできる環境となっています。このアクセスの良さが買い物の流出や人口の流出にもつながっているのかもしれません。

● コンパクトエコタウン構想

そんな沼田町をコンパクトタウンとして誰もが歩いて暮らせるまちにしようとする構想です。先ほど高橋様のお話の中で、店舗まで500メートル以上かかるような方がアクセス困難人口だというお話ありましたが、そういった統計的なものも踏まえまして高齢者が歩いて暮らせる距離が500メートルであるという統計を見たことがありますので、町の中心から半径500メートルの範囲の中で施設やサービスを集約しようというものであります。農村型コンパクトエコタウン構想は平成 26 年に内閣府の地域活性化モデルケースに認定をしていただきました。地域活性化モデルケースというのは、アベ

ノミクスの効果を全国津々浦々に波及させようということで、全国から33の事例が選定をされまして、各府省庁を横串にさしてワンストップの政策対応チーム、それから有識者によるワーキングチームが設置されまして、そのチームの中で取り組みへの支援をいただいております。

大まかにまず流れを説明させていただきます。町内唯一の入院ベッドを持っていました沼田厚生病院、それから同じように町内唯一だった生鮮食料品を扱う商業施設であるAコープ、どちらも昭和30年代の後半頃に建てられまして、50年を経過していました。この2つの建物の「50年問題」は長く課題として持っていたのですけれども、なかなか手を付けられないままに赤字が増えたり、老朽化が進んだり、存続の危機を迎えていた状況がありました。これまでの間も長く検討はしてきたのですが、いよいよ平成25年になんとかしなければいけないということで厚生病院、医療については地域包括ケアシステムの充実を進めようとしていた町が主導となりまして、また、Aコープ、商業施設の方については商店街の再生を進めようとしていた商工会が主体的になってきっかけを作っていきました。

特に移動手段を持たない高齢者にとりましては買い物も医療も大きな課題でありましたので、平成25年から多くの町民からのヒアリングを開始しました。空知総合振興局の方ですとか、道庁、それから道内にある国の機関などにも何度も相談に出向きましてたくさんのアドバイスをいただきました。まだ地方創生というものは始まっていない時期で、地域再生制度という内閣府の制度に基づいてスタートをさせました。計画を作るために特定地域再生事業費補助金を申請しまして、その後に地域再生計画、それから地域再生戦略交付金というものを申請したのですけれども、特定地域再生事業費補助金と地域活性化モデルケースは、ほぼ同時期に認定をしていただいて、国のバックアップを受けられることになりました。当時、地方創生関係の新型交付金が出る前でしたので、その前身的な地域再生戦略交付金というものをいただきながら進めました。それからもう1本、商業施設については経済産業省の地域・まちなか商業活性化支援事業というものをいただいて進めました。

医療の地域密着多機能型総合センターと、買い物の商業コミュニティ中核施設という、いかにも行政的な名前になっていますが、この2つの空間について、ほぼ同時に整備を進めることになりました。設計・建設もほとんど同じ時期にスタートしておりまして、この間、何度も町民ワークショップですとか、意見聴取ですとか、意見交換会を両施設とも行いながら進めております。

こういった経過を踏まえまして、平成29年に両方の施設が完成することになりました。使った財源については、今ほどお話したとおり地域再生戦略交付金や、地域・まちなか商業活性化支援事業、それから町からの補助金等も商業施設には出しまして、2つの空間を作ることができました。この2つの空間ができあがったのは、住民参加で何度もワークショップを重ねたというところと、それから多様な

運営主体が協働で話し合いを進めて運営にも携わっていただくということがうまく進められた要因になったのかと思っています。

今は、さらにこの２つの空間を使いこなすために乗合タクシーという制度を使いまして、郊外に住むお年寄りでもまちなかに出てきやすい状況を作っております。

● プロジェクトの始まり

プロジェクトの始まりというところに話を戻しまして、町の課題というのはたくさんあったのですが、病院の無床診療所化の問題、それから買い物・交通の問題、これが引き金になりました。他にも農業の問題、除雪の問題、介護の問題、人口減少の問題、町には全方向的にたくさんの課題がありましたので、それらをできるだけこの計画の中で解決していこうとしました。特に課題となったのがこの「雪」というところで、雪によって施設や住居が分散されていることが町の大きな課題ではないだろうかという分析をしました。人口が右肩下がりで、高齢化については右肩上がりとの辛い将来像についても町民と目をそらさずに課題の共有を行いました。

ただ一方で、沼田町としては美しい自然とか、美味しい農産物があるということは大きな魅力だと感じています。町の北側７割は山林で覆われておりまして、この山林の部分については人が居住しておりませんので、実際に人が生活している部分は下側の茶色い部分・赤い部分の３割ぐらいの場所です。もともとコンパクトではあるのですが、施設の規模が人口７千人・８千人いた当時のままでありまして、現在は人口３千人ほどなのですが、サービスが一部点在していることもありまして、今の人口に見合ったコンパクトなまちにしていく取り組みを行っています。

平成 29 年に発行されました内閣府の地域再生制度の事例集に掲載していただいた部分ですが、肝となったのはやはり住民参加と、まちをコンパクトにする、という２つが大きかったのだろうと思います。

完成した２つの新しいまちの顔のうち、まずご紹介したいのが、今日はここから話をしているのですが、医療の再構築をしました「暮らしの安心センター」という施設です。町民と何度も話し合いをして、元々入院ベッドがあったのですが、「入院ベッドはなくてもいいのでは？」というような話から診療所という形の厚生クリニックを備えています。それから、デイサービスセンターと、あまり用事がなくてもふらりと立ち寄ることができる、あんしんセンターという、３つの機能を持った複合的な建物を作りました。元々は「もっと色々な施設、福祉の施設なども作った方がいいのでは？」というような話ではあったのですが、まち全体が大きな家であって、ここがまちの縁側のようになっていれば色々な機能がここで足りるだろうということです。

● まちなかほっとタウンについて

もう１つ新しい顔となったのが今日のテーマであります商業コミュニティ中核施設である「まちなかほっとタウン」という施設です。繰り返しになりますけれども、肝となったのは多様な運営主体が関わって作ったということです。商工会、農協、そして行政が連携をしてオール沼田で運営する施設になっています。町民による町民のための商業施設ということで、きっかけとなったのが、農協さんが持っていた50年経過するＡコープです。新しい施設建設はなかなか難しいということで撤退を表明したことを受け、商工会が主体となって多目的なスペースを備えた商業コミュニティ施設を整備しなければならないと強く訴えたところです。商工会としましては単にスーパーの誘致だけではなく、将来に渡って住民の買い物の利便性を高めていこうという強い思いに、町と農協が三者で合意したという形になっています。

当時、週末などには近隣のまちのスーパーに出かける方が増えていましたが、町内で生鮮食料品を扱うスーパーはＡコープだけでしたので、絶対に買い物困難者を作らないという意思が商工会にはありました。あわせて町としては、農村型コンパクトエコタウン構想という町をコンパクトにしていこうとの構想を進めていたことが背景としてありました。

町民ニーズの調査も商工会が中心となりましてアンケート等を行いまして、食料品以外に地元の農産物や特産品を売るコーナーがほしいですとか、お弁当やお惣菜などを求める声を商工会で把握してきました。

こういった町民のニーズ調査を踏まえまして、３つのコンセプトを作っていきました。まず消費者の必需品の安定的な供給はもちろん、生活の豊かさを感じてもらうというところがコンセプトの１つ目です。コンセプトの２つ目としましては、中心市街地に自然と人が集まってくるような仕掛けを作りたいということです。そして最後の３つ目には、スーパーだけではなく中心市街地全体が活性化して賑わいを取り戻すということで、商店街も町民も元気になるという、そんな流れを作りましょうというのがコンセプトでありました。新しくできた商業コミュニティ中核施設は、３つの機能を持っていますが、食品スーパーと、利便施設というところの金融機関や、買い物支援や宅配サービスができるところ、色々な相談機能を持つところ、そしてイベントや交流ができるようなスペース、そういう３つの機能を持つ建物になっています。

もう少し詳しくお話をさせていただきます。チャレンジショップという部分では開業したい人ですとか、まちづくりグループですとか、移動販売者が調理もできるようなそんな空間を持っています。そして特産品の販売だけではなくて、宅配サービスや冠婚葬祭や、観光案内などの機能を扱う物産サービスセンターという、なんでもセンターです。それから休憩ができたり、語らったりするようなサロン的なスペース、そしてイベント広場の機能を持っています。

実施体制としましては、商工会と農協

と町がそれぞれ出資をし、議会からも人的支援を加えて運営する「株式会社まちづくりぬまた」というまちづくり会社が建物の管理や運営・物販・経理を行っています。物産サービスセンターも、まちづくりぬまたの直営で行っております。商業の確保のためには商工会だけではなく、行政だけでもなく、こういった業態を超えた連携が必要だろうと思っています。町と商工会の連携はもちろんあったのですけれども、大口の顧客を持っていました農協の協力を得られたことが事業の基盤にもなっていて、今後も地域のそれぞれのプレイヤーが地域活性化の担い手としてまちづくりで参画をしてもらうというのが町の継続的な発展につながると思っています。

これまでデマンドバスというものの実証実験を続けてきたのですが、実証を踏まえて出した結論が乗合タクシーというものであります。町内の路線バスも一部廃止をしまして、郊外から中心市街地をつなぐように乗合タクシーを走らせています。町としては大型のバスを走らせる必要がなくなったり、町内のタクシー業者は一定程度の収益が安定的に得られる、そして町民の利用者は安く乗合タクシーを利用できるという、三方良しの事業となっています。

● 今後の取り組み

こういった色々な取り組み、地道な取り組みが功を奏して、今年宝島社さんが発行している「田舎暮らしの本」という雑誌の中で住みたい田舎ランキングで3年連続北海道エリア1位と、それから今年は特に全国総合部門でも第2位という嬉しい評価をいただきましたので、田舎暮らしの魅力をこれからも発信していきたいと思っています。

少し余談になりますけれども、中心市街地はある程度、利便性が整ってきましたので、今は郊外の自然を楽しむプロジェクトというのも進めておりまして、町内には特に郊外の自然の中に化石ですとか、雪、温泉、蛍などの自然資源が点在しておりますので、これらを町全体のフィールドとしてつなげていって自然体験ができるようなことを発信しております。

町の総合計画のメインテーマを「子どもたちが誇りを持てるふるさと創造」と新しい総合計画の中で謳っておりますので、町の宝である子どもたちをみんなで大切に育てていこうという思いを込めて今まちづくりを進めています。最後に、この間、国のモデルケースにもしていただきながら、たぶん一番評価されたのは、計画段階から住民参加でまちづくりを進めたというところが一番評価をいただいたのかなと思います。これはアフリカのことわざらしいのですけれども、「早くいきたいなら一人で行きなさい、遠くへ行きたいなら皆で行きなさい」というようなことを、これからも考えていきたいと思います。町民参加・住民参加というのは、実際非常に時間はかかるんですけれども、これからはそれがスタンダードになるのではないかと思っています。

今日のこの事例が皆様の課題解決の参考に少しでもなれば幸いです。私からは以上です。ありがとうございました。

質問①　まちなかほっとタウンの施設の維持・管理にかかる費用については、まちづくりぬまたが負担しているかと思うが、賃料収入だけでまかなえているのか。また、維持・管理に関して町からの補助はあるのか。

春山様回答　今回は内訳表を持ってきていないのですが、スーパーの部分の賃料と、それから２階が農協さんの事務所になっておりまして、そこからも賃料をいただいていたり、金融機関や美容室からの賃料収入もあります。その他、町の特産品を売っている物産センターの売り上げも収益になっています。また、町のふるさと納税の返礼品の扱いをまちづくりぬまたにお願いをしており、町からの補助はありません。

質問②　乗合タクシーの利用者は１日あたりもしくは１週間で何人ぐらいで、また夏と冬では利用者数は変わるのか。

春山様回答　乗合タクシーの利用状況は１日平均約３０人、週平均約２０５人で、やはり冬の方が利用者は多いです。以前デマンドバスや路線バスを用意していた時よりは非常に利用率が上がっています。乗合タクシーと言いながらほとんど乗り合うような状況にはなりません。予約制であり、１時間以上前に予約をすることが原則になっているのですが、予約をすると家まで迎えに来てくれて、町の中心部の主要施設までタクシーで移動することができます。システム自体も町民の方に理解が進み、バスやデマンドバスを走らせていた時の利用率よりは非常に有効に使っていただいているという状況があります。

質問③　周辺市町村にも商業施設はあるかと思うが、沼田町にあるスーパーの売上を維持していくという観点から言うと、高齢者以外の車を使える住民にも町外に行かずに、町内のスーパーをより積極的に利用してもらうということが必要になるかと思う。そのために取り組まれていることがあれば教えて欲しい。

春山様回答　特に高齢者だけではなく車を持った若い世代の利用も当然必要になってきております。そのあたりについては、商工会が中心となってまちなかを活性化させる多種のイベントを行っています。まちなかほっとタウンという施設の中でもいろいろなシーズンごとに、まちづくりぬまたが主体となって色々なイベントを打っておりますので、若い世代も非常に集まりやすいような空間にしております。１つ統計的なことをお話ししますと、総合計画を作る度にアンケートをとっているのですが、前回計画の際にも「町が住みやすいか住みにくいか」という統計アンケートをとりました。平成22年の調査のときは「買い物の場所が少ない」との意見や、なぜ他の町に移りたいのかという理由を聞いたときに「買い物が不便だから」と答えた方が約６割ぐらいでしたが、この施設ができたあと、平成30 年の同じアンケートでは、「買い物が不便だから」と答えた方が４割ぐらいに

減っているという状況でした。すべての世代においてこの「買い物が不便だ」というような意識はだいぶん下がっているのだろうと思っています。

歩いて暮らそう宣言

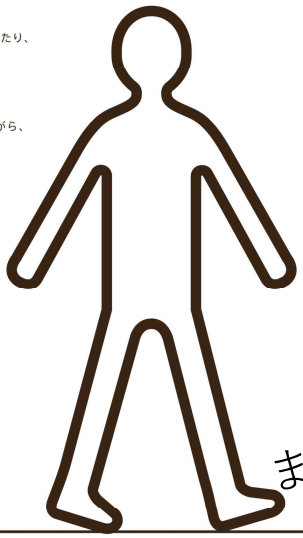
沼田町

沼田町の未来は、今、変わりはじめています。

これまであまり顔を合わせることのなかった各世代の人たちを
“なかみち”というぬくもりを感じる場所で結びつけたり、
駅から歩いて暮らせる範囲内に生活に必要なさまざまな施設を集めたり、
また、まちの至るところに自然と馴染む心安らぐような
素材や色、サインやデザインが施してあったり。

町そのものが、ただの区域というより健康や触れ合いを大切にしながら、
“大きな家”のような存在へと生まれ変わろうとしています。

さぁ、沼田町の町民の皆さん。
歩いて暮らす生活、はじめましょう。



歩いて暮らせる
まちづくりについて

2021年3月19日

買い物困難者問題解決に向けたＷＥＢセミナー

1

2

近隣へのアクセス

車で

札幌から、沼田まで140分(高速で80分)
札幌北I.C ―― 沼田I.C
留萌から、沼田まで25分
留萌大和田I.C ―― 沼田I.C
深川から、沼田まで20分
美瑛から、沼田まで80分
富良野から、沼田まで100分
新千歳空港から、沼田まで160分(高速で110分)
千歳I.C ―― 沼田I.C
旭川空港から、沼田まで70分

ＪＲで

札幌から、沼田まで(函館本線・留萌本線) 90分
旭川から、沼田まで(函館本線・留萌本線) 60分
留萌から、沼田まで(留萌本線) 40分
深川から、沼田まで(留萌本線) 15分
新千歳空港から、沼田まで 120分

3

あるいてくらせる
コンパクトエコタウンへ

高齢者が歩いて暮らせる距離は500m

コンパクトエコタウン構想の実現をめざし、シンボルとも言える「暮らしの安心センター」を建設。車に頼らず「歩いて暮らせるまち」をコンセプトに沼田駅周辺を中心とした半径約500mの範囲内に学校、診療所、高齢者の施設、スーパー等を集約。
町そのものをただの区域から、【大きな家】のような存在へ生まれ変わらせることを目標に「あるくらす」をはじめます。

4

平成26年５月
内閣府 地域活性化
モデルケース
(農山漁村・過疎地域型)選定

北海道沼田町

農村型コンパクトエコタウン構想

沼田町

5

沼田厚生病院

赤字経営
施設老朽

一般病院？
診療所？

有床？
無床？

赤字
老朽化
存続の危機

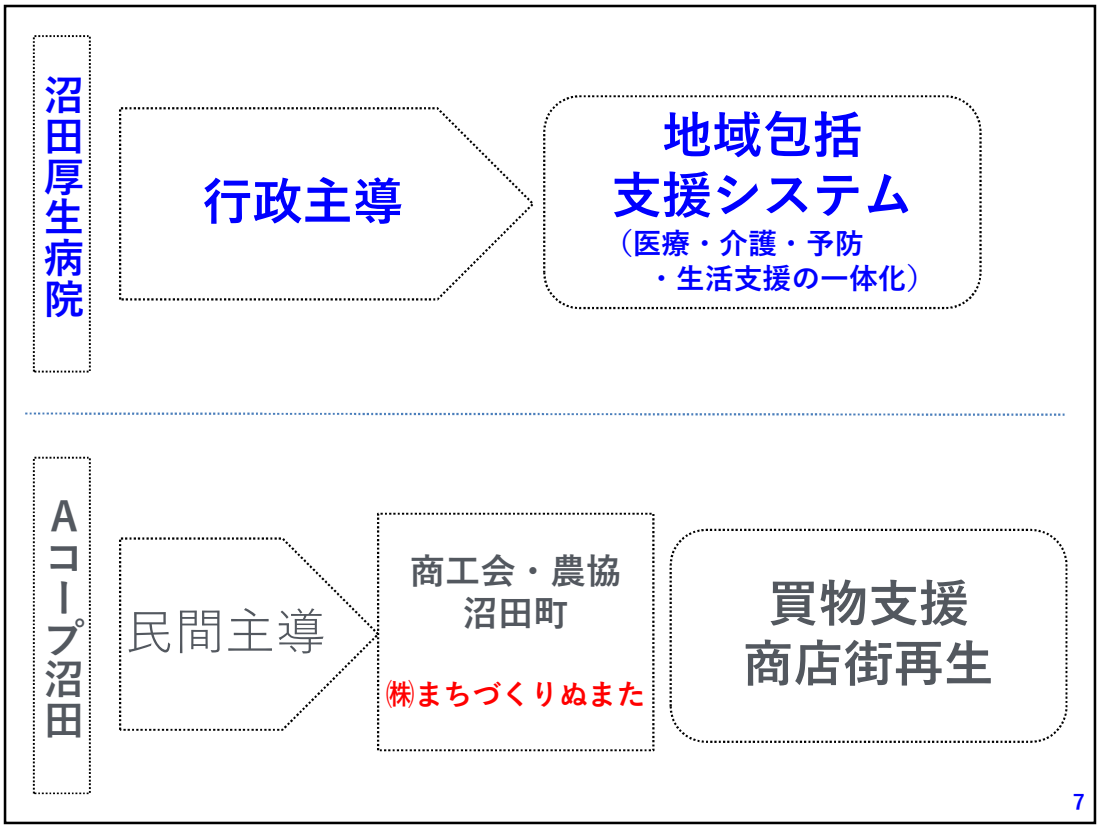
Aコープ沼田

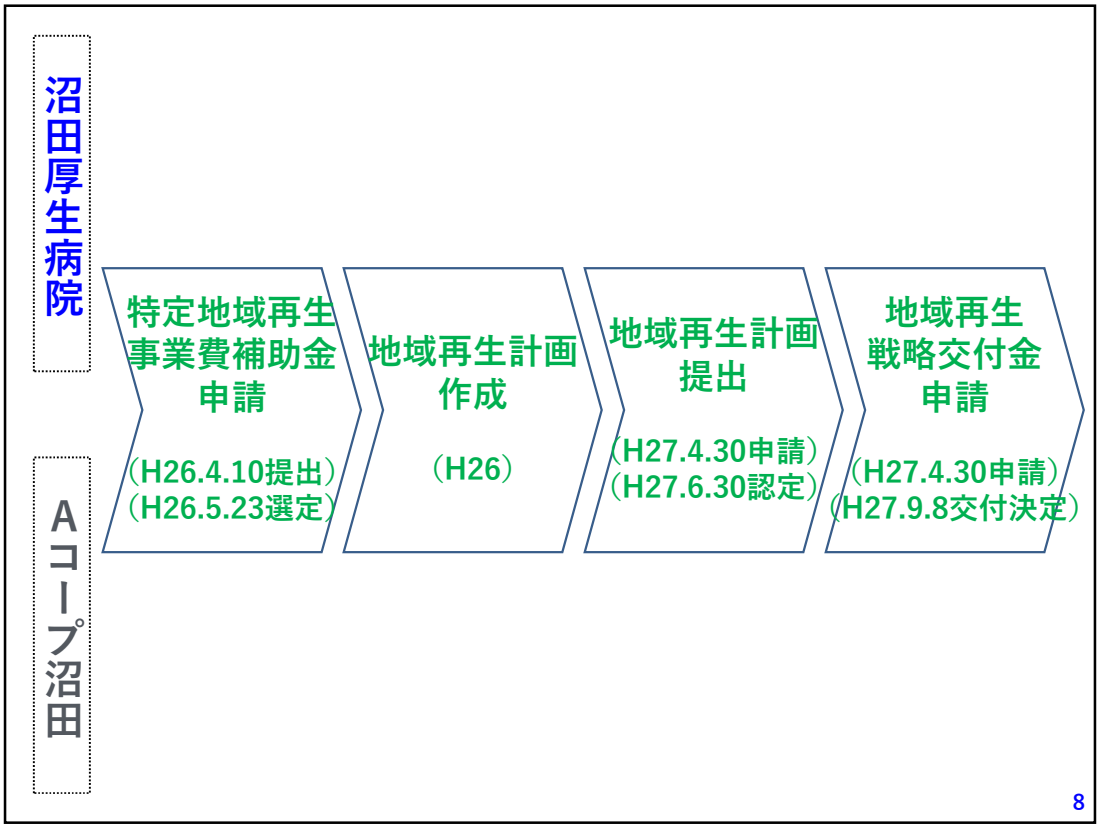
赤字経営

町外への
消費流出

農協会館の
老朽化

6


沼田厚生病院
行政主導
地域包括
支援システム
（医療・介護・予防
・生活支援の一体化）
Aコープ沼田
民間主導
商工会・農協
沼田町
㈱まちづくりぬまた
買物支援
商店街再生
7


沼田厚生病院
Aコープ沼田
特定地域再生
事業費補助金
申請
（H26.4.10提出）
（H26.5.23選定）
地域再生計画
作成
（H26）
地域再生計画
提出
（H27.4.30申請）
（H27.6.30認定）
地域再生
戦略交付金
申請
（H27.4.30申請）
（H27.9.8交付決定）
8

沼田厚生病院

行政主導

地域密着多機能型総合センター
（診療所・ﾃﾞｲｻｰﾋﾞｽ・あんしんｾﾝﾀｰ）

【活用した支援】
設計:（内閣府）
地域再生戦略交付金
建設:（内閣府）
地域再生戦略交付金

Aコープ沼田

民間主導

商業コミュニティ中核施設
（民間ｽｰﾊﾟｰ・ＪＡ事務所・美容室・金融・ｻｰﾋﾞｽｾﾝﾀｰ）

【活用した支援】
設計:（内閣府）
地域再生戦略交付金
建設:（経済産業省）
地域商業自立促進事業

9

暮らしの安心センター

【工期】
設計
Ｈ27.10.22～Ｈ28.3.21
建設
Ｈ28.6.7～Ｈ29.2.14①
Ｈ28.7.25～Ｈ29.8.31②

《オープン》
診療所　２９年７月
ディサービス・
あんしんセンター
２９年１０月

まちなかほっとタウン

【工期】
設計
Ｈ27.9.25～Ｈ28.3.10
建設
Ｈ28.7.4～Ｈ29.3.20

《オープン》
２９年４月仮オープン
２９年９月グランド
オープン

10

暮らしの安心センター

【事業費】
約10億7千万円

【建物面積】
1,９００㎡

【財源内訳】
・２７年度地域再生戦略交付金
・過疎対策事業債
・介護サービス事業債
・地域医療確保安定化基金（町）
・振興基金（町）
・ふるさとづくり基金（町）

まちなかほっとタウン

【事業費】
約7億1千万円

【建物面積】
2,１００㎡

【財源内訳】
・地域再生戦略交付金
・２８年度地域・まちなか商業活性化支援事業
（地域商業自立促進事業）
・沼田町補助金（町）
・自主財源（まちづくりぬまた）

11

暮らしの安心センター

まちなかほっとタウン

住民参加
（住民ＷＳ）
（消費者委員会）

多様な運営主体
（民間との協働）
北海道厚生連
社会福祉協議会
道北アークス
北いぶき農協

利便性向上
賑わい創出
（乗合タクシー）

歩いて暮らせるまち
街なか居住
移住定住

12

プロジェクトの始まり

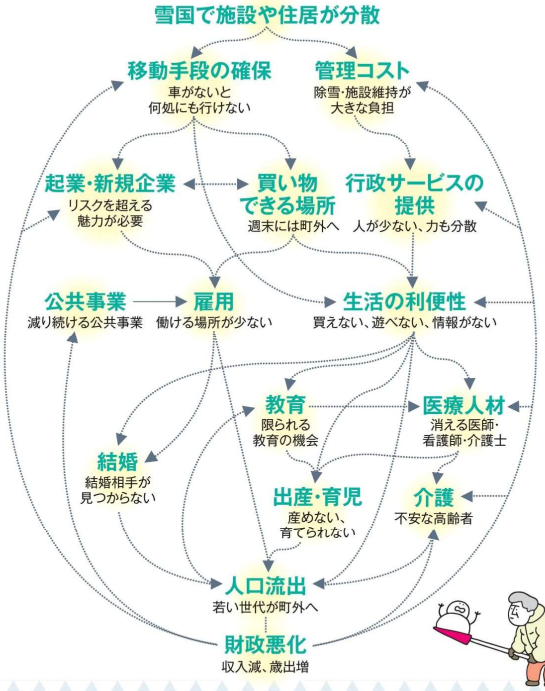
沼田町 課題のスパイラルとは？

1 農業
- ▷農家世帯の約4割が後継者なし
- ▷約7割が親と同居、介護の不安

2 病院の無床診療所化
- ▷町内で入院できない
- ▷高度医療が受けられない

3 除雪
- ▷年間8千万円の負担

4 買い物・交通
- ▷町内で買い物できない
- ▷交通の便が悪い

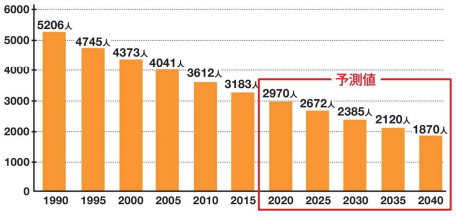


13

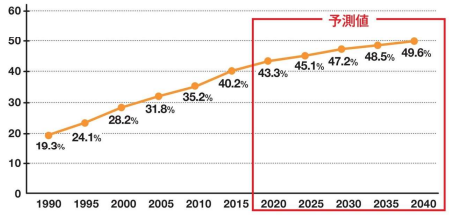
押し寄せる少子高齢化の波

沼田町は、人口3,206人、高齢化率約41.2%（平成28年6月末）の小さな町です。約20年後は、人口約2,100人、高齢化率約48%になると予測されています。

▷沼田町の人口推移と推計



▷沼田町の高齢化率と推計



沼田町の特長

1 コンパクトな市街地

2 市街地周辺の農地

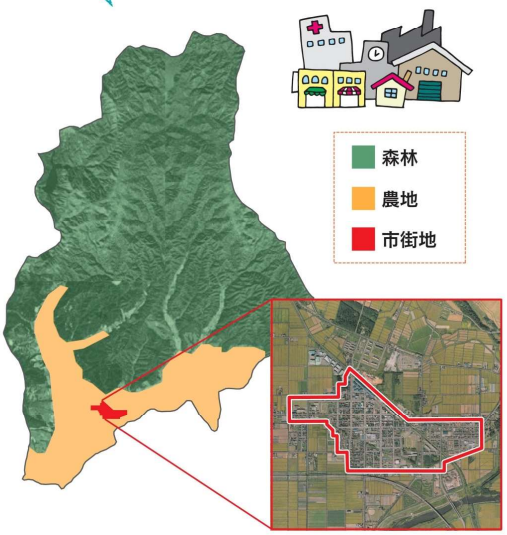
3 美味しい農産物

4 積雪2mの豪雪地帯

14

沼田町の特長を活かす

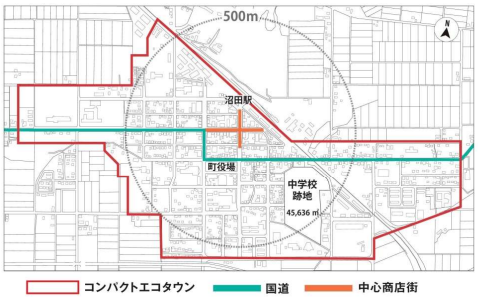
まとまりある市街地



小さなまちをさらにコンパクトに

市街地の歩いて暮らせる範囲に医療福祉・買い物・住まいなど、生活に必要なサービスを集約することで、雪国の課題を解決。
また、市街地の旧中学校跡地を活用し、基幹となる施設整備プロジェクトも進めます。

▷コンパクトタウンの範囲



15

ニーズ把握

○ 地域住民と連携して地域のニーズを踏まえたまちづくりを進めている取組

「沼田町農村型コンパクトエコタウン構想」（北海道雨竜郡沼田町：H27.6.30～H32.3.31）より

- 人口減少・少子高齢化の中で、医療福祉体制の確保や高齢者の買い物環境の改善などを図る取組を構想・推進
- 平成25年から「安心して暮らし続けられるまち」をテーマとした住民ヒアリングや住民ワークショップ・職員ワークショップを実施し、コミュニティデザインの手法による住民主体のまちづくりを推進

計画策定段階からの住民参加

特定地域再生事業費補助金（計画策定事業）等により、コンサルタントを効果的に活用して意見集約

- ◆ 住民ヒアリング
- ◆ 職員ワークショップ
- ◆ 関係主体ワークショップ
- ◆ 住民ワークショップ

＋住民への周知

○ 課題の抽出（ニーズ把握）
① 買い物が不便
② 医療や福祉面に不安
③ 交通が不便　　など

○ 住民主体のまちづくり体制の構築
まちづくりの担い手を育成し、長続きする運動に
例）

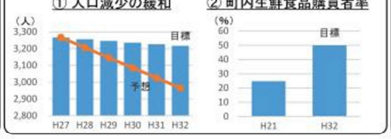
- ✓ 関係機関、地域住民との連携が円滑化
- ✓ 事業推進に係る自主組織が形成
- ✓ 住民の参加意識の高まり

「歩いて暮らせるまちづくり」構想の推進

病院、福祉施設、商業施設等を高齢者が歩いて移動できる距離（半径500メートル）に集約

- 「地域密着多機能型総合センター」設計・建設事業
  診療所・地域あんしんセンター・デイサービスセンターの3つの機能を持つワンストップ窓口を設計・建設
- 「快適住宅ゾーン」整備事業
  世代間交流や子どもたちの遊べる環境を確保した、雪の心配が少ない一般公営住宅・子育て住宅を整備
- 「商業コミュニティ中核施設」設計・建設事業
  観光協会・消費生活サービスセンター・スーパーなどの機能を持つ施設を設計・建設

主な目標



活用した主な国の支援

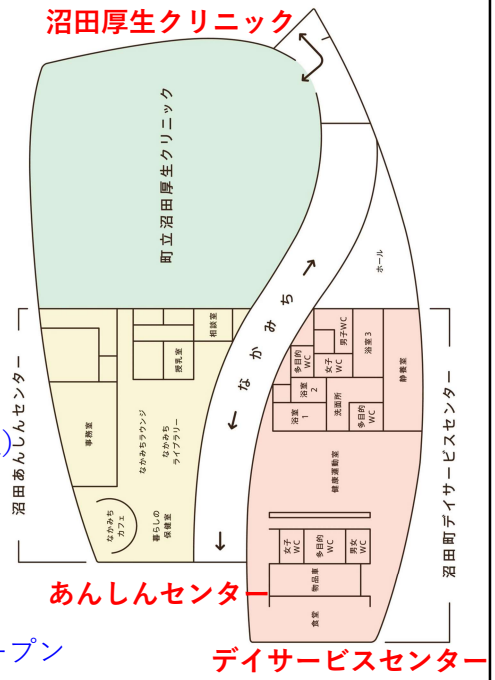
- 特定地域再生事業費補助金（策定）（内閣府）
- 地域再生戦略交付金（内閣府）
- 地域商業自立促進事業（経済産業省）

5

平成29年2月発行　内閣府地方創生推進事務局『地域再生制度 活用事例集』より

16

官民連携による地域包括ケア支援体制



H27年度地域再生戦略交付金・過疎債

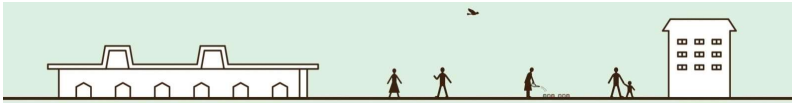
施設概要　**沼田厚生クリニック**
（北海道厚生連 指定管理委託）
デイサービスセンター
（沼田町社会福祉協議会 指定管理）
あんしんセンター
（沼田町）

総事業費　約 10億8千万円
建物面積　約 1,900㎡
H29年7月ｸﾘﾆｯｸ先行ｵｰﾌﾟﾝ・10月グランドオープン

沼田町地域密着多機能型総合センター 整備事業

17

沼田町 暮らしの安心センター

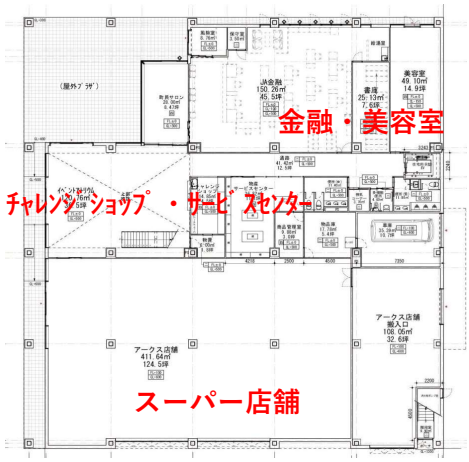


町民にとって「大きな家」のような存在になり
あらゆる世代のあらゆる人々が自然に過ごす場所にしたい

それは屋根の架かった「まちの縁側」のようなイメージ

18

官民連携による商店街の活性化



H28年度　地域・まちなか商業活性化
支援事業（中小企業庁）
※設計費の一部に地域再生戦略交付金充当
運営主体　株式会社まちづくりぬまた

【沼田町商工会・北いぶき農業協同組合 ・沼田町　出資】

テナント　農協事務所・農協金融機関・地元美容室・スーパー（道内中堅企業進出）

総事業費　約 7億1千万円
建物面積　約 2,100㎡
H29年4月仮オープン　9月グランドオープン

沼田町商業コミュニティ中核施設 整備事業

19

まちなか

沼田町 まちなかほっとタウン

安定した消費生活を実現するとともに
中心市街地の賑わいを再生する

商工会・ＪＡ・町が連携し、オール沼田町で運営する
町民による町民のための商業コミュニティ中核施設

20

住みたい田舎 北海道エリア第1位

21

まるごと自然体験プロジェクト

まちに点在する資源をつなぎあわせて、まち中をフィールドにして自然体験ができます。森の中での焚き火や真冬のテントサウナなど、遊び方は無限大∞。
そこに様々な分野で活躍する専門家を招き、町民と交流しながら新しい学びや活動をする場をつくっています！

22

23

住民参加 × デザイン

参加なくして未来なし

デザインなくして移住なし

沼田町

お問い合わせ先:沼田町役場産業創出課（春山）

〒078-2202
北海道雨竜郡沼田町南1条3丁目6-53
✆0164-35-2155　🖷0164-35-2393
✉sangyou@town.numata.lg.jp

24